

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25293437

研究課題名(和文) 看護学士課程におけるアクティブラーニング・プログラムによる看護実践能力の開発

研究課題名(英文) Development of Nursing Competencies using Active Learning Program for BSN

研究代表者

松谷 美和子 (MATSUTANI, Miwako)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：60103587

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,700,000円

研究成果の概要(和文)：看護系大学看護学生のアクティブラーニング・プログラムによる看護実践能力の開発をめざし；(1)看護学生の臨床看護実践能力到達目標の明確化を行い、(2)看護学生の看護実践能力の測定尺度(NCOS)を開発した。次いで、(3)看護学生の看護実践能力開発のための学習プログラムの具体例を収集し、(4)コンピテンシー基盤型学習プログラムにより能動的学習を促進する授業デザインへの転換、および、(5)コンピテンシー基盤型カリキュラム・デザインと実践力育成方法の知見を得た。さらに、(6)アクティブラーニング・プログラムによる看護学生の看護実践能力評価方法としてルーブリックの活用に関する新たな具体的知見を得た。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research study is to determine the effectiveness of active learning strategies on the abilities of undergraduate BSN students to attain competencies in a competency based curriculum. The objectives of the study are to: 1) describe the goals for the development of a competency based curriculum for undergraduate BSN students, 2) develop an instrument (i.e., Nursing Competency Scale (NCOS55)) to measure attainment of competencies by undergraduate BSN students, 3) identify examples of good active teaching strategies for a competency based curriculum, 4) identify faculty resources for teaching and evaluation to facilitate the transition from a content based curriculum to a competency based curriculum, and 5) provide seminars to provide faculty with knowledge about the use of rubrics and other assessment methods in a competency based curriculum.

All of these objects have been completed and outcomes have been reported.

研究分野：看護教育学

キーワード：看護実践能力 アクティブラーニング

1. 研究開始当初の背景

(1) 看護系大学は、210校(2013)を超え、適切な臨床実習環境を整えることが看護系大学の大きな課題となっている。一方、臨床看護の現場は、諸科学および医療技術の進歩、高齢化の進展、安全及び質管理認識の高まりなどにより、複雑かつ高度な知識・技術・判断が必要な状況であり、実践現場の状況は、初学者の実習には高度すぎる場合も少なくない。

(2) 看護学生の約8割が卒業後すぐに臨床現場に就職をしている。新卒の看護師は、日進月歩の現場で、新しい知識を理解し、技術を高めながら経験を積んでいく。この自己の実践力を開発し続ける基盤となる力を育成するのは、基礎教育の役割である。この基盤力は、学生が能動的に学んで初めて身につくものである。看護学生が看護実践力を身につけるためのアクティブラーニング・プログラムの開発は重要な課題である。

2. 研究の目的

本研究は、看護系大学で学ぶ看護学生のアクティブラーニング・プログラムによる看護実践能力の開発を目的とする。当該目的は次の4つの目標達成により完遂する：

- (1) 看護系大学看護学生の看護実践能力の到達目標の明確化および看護学生の看護実践能力測定尺度の開発
- (2) 看護学生の看護実践能力および学修に関する認識調査の実施
- (3) 看護学生の看護実践能力開発のためのアクティブラーニング・プログラムの具体例の収集
- (4) コンピテンシー基盤型学習プログラムにより能動的学習を促進する授業デザインへの転換方法の知見の収集
- (5) コンピテンシー基盤型カリキュラム・デザインと実践力育成方法の知見の収集
- (6) アクティブラーニング・プログラムによる看護学生の看護実践能力評価方法としてのルーブリックの活用に関する知見の収集

3. 研究の方法

- (1) 既存の実証研究に基づく看護学生の看護実践能力測定尺度の構築および看護系大学4年生への自記式質問紙調査の実施
- (2) 看護学生の看護実践能力開発のためのアクティブラーニング・プログラムに関する文献検討および具体的実践例の聴取
- (3) コンピテンシー基盤型カリキュラムに関する知見の収集と講演会の開催
- (4) 能動的学習を促進する授業デザインに関する知見の収集と講演会の開催
- (5) アクティブラーニング・プログラムによる看護学生の実践能力の開発と評価に関する知見の収集と講演会の開催

4. 研究成果

(1) **看護系大学4年生の看護実践能力および学修特性と学修成果の自己認識に関する調査**：2014年9月に4年生が在籍する全国の看護系学部・学科197校に、看護学生4年生全員への質問紙の配布を依頼し、配布への協力が得られた63校に5,661の質問紙の配布を依頼した。質問紙は、学生自身の自由意思による回答と自己投函により回収した。

① **看護実践能力測定尺度 (NCOS : Nursing Competency Scale)の開発**：NCOSは、新人看護師が必要性を認識した看護実践能力をインタビュー調査(松谷, 2010)により抽出した55項目の6段階 Likert scale による測定用具であり、7つの下位尺度 (I. 人間関係構築力、II. セルフマネジメント力、III. 自己研鑽力、IV. 基盤知識力、V. 看護技術力、VI. 看護コミットメント力、VII. 看護業務遂行力) で構成された ($\alpha=0.83$)。

② **看護系大学4年生の看護実践能力と学修特性・学修成果の自己認識に関する調査**：自記式質問紙調査を実施した。学修成果は、16項目からなる5段階尺度を用いた ($\alpha=0.84$)。

【結果】回収数1,670(29.5%)、有効回答数1,601であった。回答者の属性：年齢22歳以下(86.0%)、男性(6.9%)、他分野の学士を有する者(3.9%)、社会人経験のある者(4.1%)、大学院進学意思のある者(13.4%)であった。就職希望資格は、看護師(82.3%)、保健師(6.7%)、助産師(6.4%)であった。看護系大学4年生の看護実践能力の自己認識表1の通りであった。

表1 看護系大学4年生の看護実践能力の自己認識

	α	平均値 (100点満点換算)	SD
I.人間関係構築力	.87	63.5	9.5
II.自己管理力	.86	71.2	11.9
III.自己研鑽力	.79	67.9	13.8
IV.基礎知識力	.90	56.5	10.3
V.看護技術力	.86	59.4	10.4
VI.看護へのコミットメント力	.73	66.5	13.1
VII.看護業務遂行力	.88	57.1	13.0

看護実践能力の自己認識は、年齢が22歳以上の者、他分野の学士号を取得している者、社会人経験のある者、進学意思のある者のほうが、そうでない者に比べ有意に高かった (いずれも $p<0.001$)。看護実践能力測定尺度の7つの下位尺度の得点が7割以上の者を高得点群、70点未満の者を低得点群とした場合、高得点群は低得点群に比べ、学修成果の得点

がいずれの下位尺度でも有意に高かった ($p < 0.001$)。看護実践能力が高いと認識していた学生は学士力としての学修成果も高いと認識していた (表 2)。

表 2 看護系大学 4 年生の特性と看護実践能力の認識

属性	n	看護実践能力 平均得点±SD	T 値	P 値
年齢(22 歳以下)	1378	213.3±28.4	-3.850	0.000
(22 歳以上)	221	221.2±27.0		
性別 (男性)	110	219.1±28.8	1.815	0.070
(女性)	1490	214.0±28.2		
他分野学士号(有)	62	226.1±26.5	3.338	0.001
(無)	1536	213.9±28.3		
社会人経験(有)	66	229.9±28.6	4.560	0.000
(無)	1529	213.7±28.1		
進学意思 (有)	214	221.3±29.3	3.878	0.000
(無)	1383	213.3±28.0		

注) 看護実践能力得点範囲：55～330

看護系大学 4 年生の学修特性の認識は表 3 の通りであった。

学修特性	時々ある いつもある	たまにある ほとんどない
図書館利用	86	14
仲間と学習	77	23
学生間で議論	75	25
計画的学習	62	38
授業で発表	60	41
教員に質問	60	41
電子書籍リソース活用	55	45
授業でコミュニティ活動	47	53
遅刻	28	72
課題提出遅れ	7	93

表 3 看護系大学 4 年生の学修特性 (%)

看護系大学 4 年生の学修成果の認識は表 4 の通りであった。

学修成果	非常に/ だいぶ 高まった	変化なし 低下した
専門分野の知識	99	2
多様な価値観を持つ人々の理解	96	5
生活する地域の問題の理解	89	11
問題解決力	85	15
論理的思考力	82	18
就職準備性	78	22
時間自己管理能力	74	26
国の課題への理解	62	38
一般教養知識	59	41
リーダーシップ力	57	43
大学卒業準備性	45	55
地球規模の問題の理解	44	57
異文化・異民族と共存する力	36	64
進学準備性	20	80
国際交流力	17	83
外国語力	14	86

表 4 看護系大学 4 年生の学修成果の認識 (%)

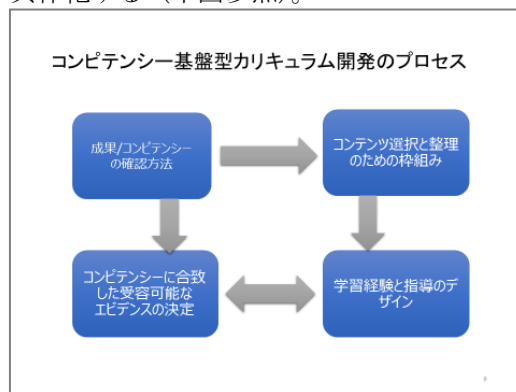
(2) 看護学生の看護実践能力開発のためのアクティブラーニング・プログラムの具体例

カーネギー財団看護教育全米調査報告 (2010) は看護学部における授業の重要な問題を指摘し、問うことや話し合うことを刺激、促進することを先行させなければならないとしている。このような協働的学習コミュニティを実現している教員の一人として Lisa Day を同報告書は紹介している。Day 氏を米国の Duke 大学に訪ね、その授業の展開方法に関する知見を得た。学生が臨床現場で求められる能力を得るには、重要性識別力 *sense of salience* を学ぶ場、臨床イメージ力を開発する場、看護専門職者としての形成を開始する場が提供されなければならない。これらを創り出す授業デザインとして、Day は Palmer (1998) が提案した主題中心授業 *Subject-Centered Classroom* を採用している。次々と展開していくケーススタディ *unfolding case studies* を用い、看護専門職者としての教師が実践の場でおかしいなどと思う感覚 *curiosity* や深刻な事態 *seriousness* のロールモデルとなり、患者、クライアント、家族、コミュニティへの最適なケアを提供しようとする学生と教師による協働作業が実現する。

(3) コンピテンシー基盤型カリキュラムとコンセプト基盤型カリキュラムに関する知見の収集と講演会の開催

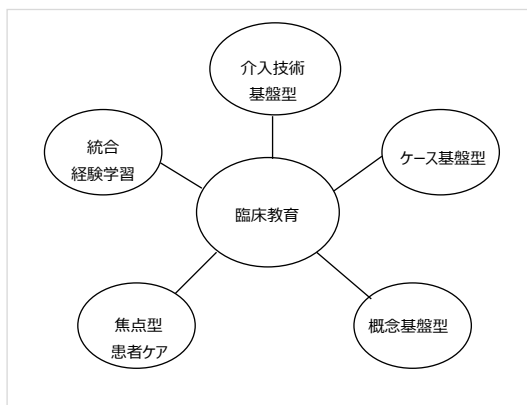
看護学生の卒業時の到達目標はコンピテンシーに基づいて表現され、それらのコンピテンシーを達成するための系統的学習にはコンセプトを用いるというオレゴン看護教育コンソーシアム (OCNE: Oregon Consortium for Nursing Education) のカリキュラム構築に関する知見を得た。OCNE のサイトは日本からでもアクセス可能である。

コンピテンシー基盤型カリキュラム開発のプロセスは次の順序で進める：①コンピテンシー/成果を定義する、②コンピテンシー/成果の確認方法を決定する、③学習経験と指導を計画する。コンピテンシー/成果の確認方法はコンピテンシーに合致した受容可能なエビデンスの決定に関与し、同時にコンテンツ選択と整理のための枠組み構築を進める。その上で、学習経験と指導のデザインを具体化する (下図参照)。



(4) 能動的学習を促進する授業デザインに関する知見の収集と講演会の開催

実習の形態をとる授業では、介入技術基盤型の実習、ケース基盤型実習、概念に焦点化した実習、頻繁に発生する症例に焦点化した実習、選択した集団についての研究を行い、深い理解をめざす統合経験実習を、段階を追って行う。これらの実習は、講義や演習形態の授業と密接につながっている（下図参照）。



(5) アクティブラーニング・プログラムによる看護学生の实践能力の開発と評価に関する知見の収集と講演会の開催

米国オレゴンヘルス大学看護学部教授の Kathie Lasater 氏を招聘し、ラサター臨床判断ルーブリックについて研究成果を共有し、講演会を開催した。【成果】臨床判断とは、患者のニーズ・関心事・健康問題に関する解釈や結論、行為をするかしないかという判断、患者の反応によって適切だと思われることをその場で考え出して行う判断と定義される。看護師のように考える力は、この臨床判断モデルを用いて育むことができる。Chris Tanner (2006) は、①コンテキスト・背景・関係をベースに気づく、②解釈する、③反応する、④省察するという、看護師が臨床で踏む一連の局面をモデル化した。Lasater (2007) は、このモデルのそれぞれの局面の評価基準をルーブリックとして完成させた。当該ルーブリックは、演習や実習の自己評価に用いられるとともに、学生の深い理解を促進するための道具として教員による学生指導に生かすことができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

- ① 松谷美和子, 平林優子, 林智子. 看護学生の看護実践能力・資質と学修成果の自己認識. 日本看護学教育学会第 25 回学術集会, 2015.
- ② 松谷美和子, 平林優子, 奥裕美, 三浦友理子, 佐居由美, 中村めぐみ. 看護系大学 4 年生の学修特性と学修成果, 2017.
- ③ 松谷美和子, 佐居由美, 三浦友理子, 奥

裕美, 中村めぐみ, 平林優子. 看護系大学 4 年生の認識する看護実践能力と学修特性. 日本看護科学学会第 37 回学術集会, 2017.

〔その他〕

報告書 看護学士課程におけるアクティブラーニング・プログラムによる看護実践能力の開発, 2018. 3.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松谷 美和子 (MATSUTANI, Miwako)
聖路加国際大学大学院看護学研究科・教授
研究者番号: 60103587

(2) 研究分担者

平林 優子 (HIRABAYASHI, Yuko)
信州大学学術研究院保健学系・教授
研究者番号: 50228813

本城(佐居) 由美 (HONJO, Yumi)

聖路加国際大学大学院看護学研究科・准教授
研究者番号: 10297070

奥 裕美 (OKU, Hiromi)

聖路加国際大学大学院看護学研究科・准教授
研究者番号: 80439512

三浦 友理子 (MIURA, Yuriko)

聖路加国際大学大学院看護学研究科・助教
研究者番号: 70709493

(3) 連携研究者

林 智子 (HAYASHI, Tomoko)
三重大学医学部看護学科・教授
研究者番号: 70324514

中村 めぐみ (NAKAMURA, Megumi)

聖路加国際大学大学院・臨床教授
研究者番号: 50407623

(4) 研究協力者

井部 俊子 (IBE, Toshiko)
宇都宮 明美 (UTSUNOMIYA, Akemi)
倉岡 有美子 (KURAOKA, Yumiko)
西野 理英 (NISHINO, Rie)
寺田 麻子 (TERADA, Asako)
飯田 正子 (IIDA, Masako)
岩崎 寿賀子 (IWASAKI, Sugako)
高屋 尚子 (TAKAYA, Takako)
藤井 由利子 (FUJII, Yuriko)